



# ごみ問題を「自分ごと化」 21世紀型思考の子ども育成へ

◎羽村市立武蔵野小学校

DATA	児童数	441人
	クラス数	16組
	校長	海東朝美
		(2022年5月1日現在)

「ごみ処理やリサイクルの事に携わる人との交流を通じて、子どもたちがごみ問題について理解を深め、自分たちでできることを考えられるように導く試みが、東京都羽村市の市立武蔵野小学校で行われている。同校第5学年の「総合的な学習の時間」を活用した取り組みで、10月28日には、市生活環境課、西多摩衛生組合、羽村市リサイクルセンター、西東京リサイクルセンターなどから招かれた5人のゲストティーチャーが、子どもたちからごみ問題の解決法について相談を受け、アドバイスをすかたちで授業が進められた。

## 子どもたちが考えた「作戦」

この日、5年2組の授業が行われた家庭科室では、ごみ問題を解決するために自分たちで考えた「作戦」ごとに、子どもたちがグループに分かれて着席した。作戦とは、①「生ごみ」②「びん・缶」③「学校にリサイクルボックスを設置する」④「3R」⑤「ポスターや3Rすごろくを作って学校のたぐさんの人たちに知ってもらおう、

④「分別」⑤「ポスター、スライド、放送で解決を呼び掛ける」⑥「分別」⑦「自分が分別する、家族に伝える、学校にポスターを貼る」⑧「PETボトル」⑨「自動販売機の横に段ボールなどで、ラベルとキャップの回収箱を置く、⑦「PETボトル」⑧「ラベルやキャップを外して中身をすすぐ、回収ボックスに入れるようにする、⑧「プラスチック」⑨「ポスターを貼る、⑨「プラスチック」⑩「マイボトル、マイバッグを必ず持ち歩く、そのためにポスターで呼びかける」の9つである。

子どもたちの拍手に迎えられ、ゲストティーチャーの5人が登場。羽村市生活環境係の高橋和嗣係長、同市リサイクルセンターの石川忠弥氏、西多摩衛生組合総務課の伊藤一統係長、元・西多摩衛生組合施設長の島田善道氏（現・アーキアエナジー（株）顧問）、（株）西東京リサイクルセンター取締役の大橋徳久会長という顔ぶれだ。紹介が終わると、早速ゲストティーチャーが担当するグループを回り、それぞれの作戦について子どもたちから説明を受けたうえでアドバイスを評価を与える、子



「自分たちが考えた作戦を相談して、考えを深めよう」。授業がスタート。右は担任の島崎先生

きたので、資源の中で何が一番いいのか聞くと、「電気」という答えが出てきました。そこで「ごみを分別せずに、いきなり燃やしても電気なる」と話を振ると、「電気になるまでいろいろな問題が出てくる」という回答もあって、子どもたちが分別というテーマをきっかけに、環境のことを広く考えていることに感心しました」

一方、子どもたちからは、今回のゲストティーチャーとの交流について、「びん・缶などに他のものが混ざってしまうと、後で取り除かなしといけないので手間が

かかる。分別がされていると、リサイクルしやすいことがわかった」などの感想が聞かれた。担任の島崎教諭からの「自分たちの考えを伝えることで学んだことは」の問いかけには、「自分たちの知らないことを知ることができた」という回答があり、考えを深めることにつながったようだ。

## 社会と出会うことで 問いが生れる

総合的な学習の時間を活用した、ごみ問題の学習は、今回が10回目

となる。これまでの授業を通じて、子どもたちは、最初の段階でごみ問題について知り、次の段階で、ゲストティーチャーを交えながら、ごみ問題を解決する方法を学んできた。7時目以降から、ごみ問題について自分ができることを考える段階に入り、自分の考えを伝える考えに賛同する子どもたち同士でグループを作成したり、情報の発信の仕方を整理し、自分たちでできることを考えようといった学びの過程を経て、今回の授業にいたっ

た。同校が総合的な学習を通じて進

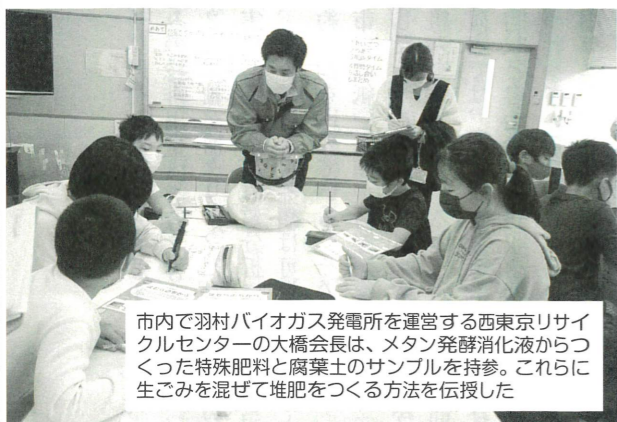
める「社会とつながるプロジェクト」では、21世紀型思考（主体的な自分づくり・みんなで力を合わせて解決する）が実現できる学びの過程を重視する。具体的には、子どもたちが社会と出会うことで「問い」が生まれ、課題を自分のこととして考えられるようになり、多様な他者と協働して、考えを再構築しながら、主体的に最適解を導いていく。このようなトライ＆エラーを繰り返す中で、「生きて働く本物の力」を育成しようというものだ。

海東朝美校長は、「子どもたちが企業や市役所などのさまざまな人と出会い、問いをもって他者と協働することで、1+1が3以上になる考えをつくっていくことが重要です。これからのICTが進展し、仕事に限られてくる世の中で生き抜いていくために、自分たちでものごとを考え、納得解をつくっていく資質や能力を身に付けさせてあげてから中学校に送りたいと思います（今回のような授業が）その基礎になれば」と語った。W

（本誌・新倉）



ゲストティーチャーと子どもたちとの活発なやり取りが続く



市内で羽村バイオガス発電所を運営する西東京リサイクルセンターの大橋会長は、メタン発酵消化液からつくった特殊肥料と腐葉土のサンプルを持参。これらに生ごみを混ぜて堆肥をつくる方法を伝授した



最後に各ゲストティーチャーからひと言。「一人ひとりが食品ロス削減を少しずつがんばればごみを減らせる」、「まずは分別を」、「今日学んだことを、家族や友人に伝えて世の中を変えていってほしい」など、それぞれの思いを伝えた